

2015年度京都文教大学人間学研究所企画事業

映画『新しき民』（監督：山崎樹一郎）
上映会＋トークイベント
実施報告および独自制作パンフレット載録

共催：京都文教大学総合社会学部メディア・社会心理コース
京都文教大学校友会（※10月31日実施分のみ）

- ◆日程その１：2015年10月31日（土） 会場：京都文教大学 14201号室
※京都文教大学・京都文教短期大学学園祭『指月祭』内での実施
（１回目上映）10：30～12：30（トークなし）
（２回目上映）13：00～15：30（トーク含む）
ゲスト：山崎樹一郎（映画監督）
司 会：佐野 伸晃（本学総合社会学科３回生・在校生代表）
- ◆日程その２：2015年11月1日（日） 会場：キャンパスプラザ京都５階 第一講義室
時 間：15：30～18：00
ゲスト：山崎樹一郎（映画監督）
司 会：小林 康正（京都文教大学人間学研究所所長）

【解題：小林康正】

2015年度における人間学研究所独自企画として、映画『新しき民』（2014年）を上映し、監督である山崎樹一郎氏を迎えたトークセッションを実施した。本作品は江戸時代に岡山県真庭地域で起こった「山中一揆」を題材にした時代劇で、「一揆に加わずに逃げた農民」を主人公にした設定や、過去と現代の時空間をつなぐ斬新な演出などが特徴的であり、国内にとどまらず、ニューヨークやアムステルダムなど海外でも招待上映が行われるなど高い評価を得ている。

本上映会を企画していた段階では予想していなかったことだが、折しも2015年の日本では安全保障関連法案をめぐる様々な動きがあった年として記憶され、そこから「SEALDs」に代表されるような新たな社会運動の在り方を模索する動きが現出したことも特筆できよう。ゆえに「一揆」というテーマを扱った本作品をこのタイミングで上映し、現代に通じるものとして語り合うことには大きい意義があった。

そしてまた、昨年度に実施した映画上映イベントにおいて取り上げたドキュメンタリー映画であり、東日本大震災後の福島における一つの古い劇場をめぐる地域住民の語りを扱った『ASAHIZA：人間は、どこへ行く』（藤井光監督、2013年）と同様に、本作品も地域性との深い関わりという面で問題意識が通じている。時代こそ違えど、その場所で起こった圧倒的な出来事や歴史にたいして、市井の個々人がいかに向き合うか、その想いや葛藤を観る者に問いかける映画としてこの二つの作品を位置づけることができる。

本上映会後のトークセッションにおいては、外国人の来場者から「このような反骨精神を昔から

日本人が持っていることに感心した。こうしたテーマが映画として作られること自体も一揆の精神だと思った」という感想があった。それを受けて山崎監督は、現在の政治状況を踏まえるとうこうした映画が作れないときがくるかもしれないと述べつつ、「主人公は民衆の運動から逃げるという選択をせざるをえないわけですが、そこがこの映画でやりたかったことであり、この映画ができた理由だと思っています。権力に対する民衆の団結は重要な闘いであるけれども、その団結からすら背を向けて逃げてもよいということを言えたのではと思っています。民衆だからといって集団化、団結することのみを強調することを、この『山中一揆』を扱うにあたってはやりたくなくて、そこからも背を向けることが、いま見えにくくなっている『自由』というものに、何らかの考えるきっかけがあるのではないか」と語った。

表現者としてのこうした問題意識を抱えつつ、山崎監督は約10年前から当地の真庭に移住してトマト農家を営み、そこで地域の人々の協力を得ながら映画を撮り続けている。そしてその両方の仕事のなかに「種をまき、実がなり、収穫し、それが消費した人の血肉となっていく」と共通するものを感じ、どちらも続けていきたいと述べる。

地道な種まきを通して何らかの実を結ぶよう、多様な学びや問いかけを育んでいく営みという意味においては、我々が課題とする研究・教育実践のあり方にも通じるものがある。以下においては、本イベントの来場者に「山中一揆」や山崎監督自身についての理解を深めてもらうべく独自制作したパンフレットの内容を収録しているが、本文のなかでは特に触れていない点として、山崎樹一郎監督がもともと本学の卒業生であったことについて、この場で改めて書き添えておきたい。つまりそれは、開学20周年を控える本学がそのはじまりから据えた「人間学」のコンセプトにおいて、そこから育まれた「芽」のひとつが試行錯誤を通じて自らの言葉や表現を磨き上げ、生活者としても地域社会に深く関わり、たくましく実りを結んでいった記録としても捉えられよう。

本パンフレットの制作においては、山崎樹一郎監督をはじめ、山中一揆義民顕彰会会長の植木紋次郎氏、配給元の「一揆の映画プロジェクト」に多大なご協力を賜った。ここに深く御礼を申し上げます。

『新しき民』独自制作パンフレット 載録

＜注記＞本パンフレットは、京都文教大学人間学研究所が2015年11月1日に実施した『新しき民』上映会のために特別に作成したものであり、『新しき民』の公式パンフレットとは異なります。製作・配給元である「一揆の映画プロジェクト」からは本作品の広報用資料および関連写真画像のご提供をいただきましたが、本パンフレットに記載された内容につきましてはすべて京都文教大学人間学研究所の編集責任に負うものでありますことをご了承ください。



山中一揆と義民伝承

文と写真：小林 康正
(京都文教大学人間学研究所所長)

I 山中一揆

一揆前夜

山中一揆とは、享保11（1728）年から翌年にかけて「山中」を中心に美作津山藩領で起きた一揆をさす。山中とは真島・大庭の両郡の勝山以北の地をいい、現在の岡山県真庭市北部に重なる。

元禄11（1698）年、松平宣富が10万石を与えられて津山に入封したのに伴い、山中三触（三

家触・湯本触・小童谷触。触＝大庄屋の管轄区域）もその支配下に置かれるようになった。2代目藩主の松平浅五郎は生来病弱で享保11（1726）年秋には重篤な状態に陥っていた。浅五郎が亡くなれば、世継ぎがないため改易、減封、国替になるという不安が領内で高まっていた。

一方、窮乏する財政を立て直すため、勘定奉行・久保新平は、年貢納期の繰り上げを命じ、完納するまで麦播きを禁止しただけでなく、さらに四歩加免（年貢4%増徴）を命じた。この最中の11月11日に浅五郎が没し、改易は免れたものの5万石へと減封されることになった。藩内では真島郡・大庭郡が減知されるとの噂が広まり、両郡の農民の間では納入済みの年貢の行

方についての関心が高まっていく。11月21日の夜、大庭郡河内触の大庄屋・中庄屋ら3人が、西原（落合）の郷倉に納められていた年貢米のうち自分の米を持ち出そうとして露見し、欠落するという事件が発生する。

こうした中で、久保は真島・大庭の両郡が滅知されると判断し、28日久世の郷倉から年貢米を運び出させることにした。これを察知した農民たちが追及したため、藩は中止するそぶりを見せたが、結局翌朝船で年貢米を運び出した。

蜂起と勝利

ここにおいて農民たちは藩に対する不満を爆発させ、12月3日に久世に集結することを告げる天狗状が山中や付近の村々にまわされた。一揆を率いたのは牧村の徳右衛門、見尾村の弥次郎らであった。集結した農民たちは4000人から6000人にも及んだと言われ、彼らの要求は次のようなものであった。

1. 未納分の年貢（14%）を免除
2. 四分加免（4%の増税）の免除
3. 借米の返済の免除
4. 大豆納、山年貢、炭焼き、木地引き等の諸運上銀の免除
5. 大庄屋・中庄屋、村庄屋を廃止して、状着を置くこと
6. 大庄屋・中庄屋・村庄屋が所持している諸帳簿を村方に渡すこと

藩との交渉の結果、4.を除きほとんどの主張が受け入れられるという農民側の勝利に終わったが、事態はこのままで収束しなかった。12月21日、目本触檜村などの農民が中庄屋、村庄屋に押しかけ、納めすぎの年貢の返還要求を改めておこなった。しかし、庄屋たちはこれを拒否したので、打ち殺すべしとの騒ぎになり、すぐさまこの動きは山中三触全域に広がった。

藩は救済用の米切手1,800俵分を与えて農民を納得させようとした。ところが、一揆のリーダー徳右衛門らは、米切手を紙切れ用たち申さずとして米への交換を求めたので、大庄屋たちはこのままでは山中地方が農民のものになってしまうと藩に訴えてた。

弾圧と悲劇的結末

津山藩はここに至り一揆の武力弾圧の方針を決定する。三木甚左衛門・山田文八両代官の率いる鎮圧隊が翌享保12（1727）年正月6日に久世に到着。これを知った農民たちは久世の三坂峠に800名を集結させ鎮圧隊の山中への侵入を防ぐ策にでる。そこで鎮圧隊は、正月7日に意表を突いて出雲街道から山中の裏側の美甘・新庄に向かい、田口村で三郎右衛門・長右衛門を、新庄村では久太郎ら3名を捕らえ、今井河原で処刑して首切峠と今井河原に首を晒した。鎮圧隊はさらに土居村（湯原町禾津）に背後から侵入し、柿の木坂に潜伏していた徳右衛門を捕縛した他、32人を捉え、翌13日には25人を土居河原にて処刑した。これにより一揆は総崩れとなった。

徳右衛門・忠右衛門・喜平次の3人は頭取ということで津山に護送された。弥次郎も見尾の聖岳に潜伏しているところを捕らえられ、津山に送られた。徳右衛門、弥次郎の2人は引き回しの上磔となった。この騒動で犠牲となった農民は51名とされている。山中一揆は結果として農民側の惨憺たる敗北であった。

一方、藩側でも処分が行われ、一揆のきっかけをつくった勘定奉行久保新平は、御役御免、家財没収の上追放となった。

参考文献

『山中一揆』山中一揆義民顕彰会1999、『備前備中美作百姓一揆史料』長光徳和1978（第一巻）

Ⅱ 山中一揆の記念碑

51人の処刑という悲劇的な結末を残した山中一揆は、現在様々なかたちでこの地域に伝えられている。石塔などの記念物はその代表的なものであり、各地に多数が残されている。また、そこには伝説や言い伝えが付随されている場合も多い。ここではそのいくつかを紹介する。

1) 山中一揆義民の碑

旧湯原町禾津の町民グランド入口付近。徳右衛門就縛の地・柿の木坂とされる。

1982年に山中一揆義民顕彰会が関係町村をはじめ1400人から800万円の寄付を集めて、義民碑、慰霊碑、義民堂を建設した。毎年5月2日に義民祭がおこなわれ、柴燈護摩が焚かれる。



【写真提供：山中一揆義民顕彰会】

2) 徳右衛門御前（みさき）

旧湯原町大字仲間牧の国道沿い。「清眼則勇信士」と刻まれた石碑。一揆の主導者（池田）徳右衛門の墓石。嘉永7年に大庄屋、庄屋、年寄などにより建立。かつては傍らに小堂があり、

法印が管理していた。徳右衛門の命日の3月12日と秋の彼岸にミサキ様の祭がおこなわれた。また頭の病の神として信仰を集めた。



3) 三坂峠の首なし地蔵

旧湯原町から久世に抜ける峠。土居河原で斬首になった13人の首が晒された。首切りこうげともいう。石地藏元文6（1741）年の銘がある。

4) 清水寺の供養塔

旧湯原町久見の清水寺の境内。「過去亡霊二十五人為菩薩 供養 大佛頂陀羅尼一万八千遍誦之 享保十二年未天正月十三日 清水寺」と刻まれた石碑。昭和40年頃に処刑地と考えられる禾津の川の中から発見された。土居河原で処刑された25名の菩提を弔う石碑と考えられる。

5) 大林寺の妙典塚

旧湯原町黒杭の大林寺境内。「大乘妙典書写一石一部塚 享保十二丁未年九月教主」処刑された人々の法名と俗名が刻まれ、苔むして文字は明確に読み取ることはできないが、菩提を弔う人々は津山藩の暴政の犠牲者である旨が刻まれていると伝えられている。

6) 弥次郎の碑と忠犬の碑

旧勝山町見尾「くにし山」。「義民樋口弥治郎碑」と「義民弥治郎忠犬塚」がある。「大正六年三月十七日勝山町城北有志青年一同建立」と刻まれている。一揆が壊滅した後、再起を図るため聖岳（現・弥治郎嶽）にの洞窟に隠れてい

た弥次郎に忠犬が食べ物を届けていたという伝説がある。



7) 田部義民の墓

旧川上村西茅部田部。小堂の境内に一揆の犠牲者20体の墓碑が並べられている。土居河原湯本河原で処刑された西茅部村20人の墓と伝えられる。石碑は後年集められたものといわれている。



8) 社田（こそだ）義民の墓

旧川上村西茅部社田。「刃了禪定門 享保十二年宗天一月十三日」と刻まれている。



他に、萩原の万霊供養の道標（旧湯原町見明戸萩原）、三倉の善六みさき（旧湯原町種）、檜村の道全の供養塔（旧久世町檜村）、鉄山の剣のみさき（旧美甘村鉄山大槌）、大森の義民父子の祠（旧川上村東茅部）など多数。

山崎樹一郎監督 インタビュー

（インタビューと構成 小林 康正 2015年10月17日）



▲山崎樹一郎監督。栽培しているトマトの前で

仕事場訪問 ー トマトをつくる

岡山県真庭市都喜足（つぎたる）にある山崎さんのトマト栽培の仕事場におじゃました。都喜足は真庭市の中心部の勝山から車で30分ほどの北に遡ったところにある。十数戸の小さな集落。岡山県の代表的な河川の一つ旭川が刻む深い谷の東岸に位置し、可耕地は広くない。



▲トマト栽培を行っているビニールハウス。
後景には修験の霊峰でもある櫃ヶ山（ひつがせん）



▲笑顔で迎えてくれた山崎監督のお祖母さん。94歳。
小柄なからだをさらに折り曲げて自宅前で畑仕事を
しておられた。矍鑠ぶりに敬服

現在トマト栽培用のビニールハウスが4棟あり、最長のものが55メートル。他のものは40メートル前後だという。大きい方のハウスに入れてもらったが、遠近法も手伝ってかなりの奥行きを感じる。ここで一人でトマトを作っている。

4月に育苗を開始、5月に定植、成長に従い誘引、芽かき、7月からは収穫と出荷が始まり、10月まではそれが毎日続き、11月末で終わりになる。特に7月から9月の間は収穫と管理とが重なって休む暇がない。

とくに台風が来ると、ハウスを守るための対策に手が取られるので、他の作業が後回しになっててんてこ舞いになる。最悪の場合、ビニールを全部除けてハウスを飛ばされないようにしなければならない。そうすると、トマトの損害は致し方ないということになる。今夏にニューヨークの映画祭に招待された際も台風の襲来と重なり、滞在たった1日のとんぼ返りとなってしまった。



▲ 品質が満たず出荷できないトマト

このように7月から9月はとにかく忙しいのだ。そのうえトマト栽培は他の作物に比べても難しいらしい。そこで「苦労が多いと思うが」と、問い掛けてみた。するとすぐさま遮るように「面白い」との返答が。「トマトがなるわけですから。」

このあたりが山崎さんが農業という仕事を選んだ理由なのだろう。食べ物をつくるということが人間の基本であり、それができるということが自信の回復につながったと語っている。

山崎さんがここでトマトづくりを始めたのが2006年。岡山県の新規就農研修制度を利用した。最初の2年は研修を受けると同時に、近所や知

り合いからも教えてもらいながらトマトを作り始めた。

「いろんな人の協力で、ビニールハウスだとか古いのを貰ってきて、1年目から作っていたのは作っていた。農協に出していた。それと並行して支援制度の実務研修という名前で農家のトマトづくりは一月見習いさせてもらったり、訊きに行ったりする。こういう時はどうするかああいうときはどうするかって。訊きながら本読んで勉強したりする。」

トマトづくりを始めるにあたっての家族の反応は複雑だった。27歳といえばいっばしの大人。いきなり都会から来て、経験のない農業を始めるというのだから、将来について心配したのかもしれない。もちろん今では応援してくれている。

こうしたわけで映画の制作時期は、11月末から3月の期間に限られる。上映もこの時期が中心となる。真庭に来てから撮った映画3篇はすべてが冬の映画になっている。「自動的に夏の映画を作れない映画監督」とのことであるが、映画と農業の二つは、山崎さんの中では切り離せない関係を持っている。

映画製作との出会い

「映画を作ろうと思ったのは大学入ってから。それまで音楽の方がウエートが大きかったんで。ただ、映画はずっと好きで、中学高校とよく見ていたが、映画音楽の方が好きだった。ワールドミュージックとか興味があって。」

「映研（映画研究会）に入ったきっかけは、大学での最初の友人と関心が共通したから。部活、何に入ってから話になって、僕は民族音楽のサークルに入ろうと思っている、と。彼は映研に入ろうと思ってたんですね。二人ともどっちも興味があったから両方二人で入るかという話になった。」

ただ当時の映研は、先輩一人を除いてあとは幽霊部員という状況。必然的に二人が外部との

交渉にあたるようになる。それで、大阪の大学の映画研究サークルが集まって映画を上映する学生団体「関西シネマランド」に代表で参加するようになった。

「そこで学生映画というものにはじめて出会うんですね。もうそれは見たこともないアングラな映画ですね。大阪芸大なんかは技術レベルが高くて学生では撮れないような映画を作っていた。それで、学生でも映画を作れるのかと、僕らも思った。」

その後、「京都シネック」という京都にある同様の学生団体に参加して、学生映画祭の実行委員を務めることになった。映画祭に向けて企画を日夜考えたり、送られてきた応募作から上映作品を選考したりといった作業を4年ぐらい続けることになる。こうした交流の中で、多くの仲間ができるようになった。

山崎さんはこの期間に自らも短編映画を何篇か撮影している。京都シネックを通じて知り合った仲間たちがお互いに応援して映画をつくるというやり方だった。「映画のことは映画祭で学んだというか、育った。」というわけである。

映画祭の仲間たちはけっして映画を専門とはしていない一般の大学生だったが、映画人を養成する大切な場にもなっていた。彼らの中には現在も映画制作に携わっている者、プロの現場に入っている者、商業映画のプロデューサー。フランスの映画祭のプログラマーなどで活躍している人たちがいる。いろんな方面で活躍している。そして、このときのつながりは現在に生きている。

こうした活動をする中で山崎さんはもう一つの大きな出会いをする。彼が関西で映画を作り続けている作家の作品の選ぶ「関西セレクション」の担当を任されたのをきっかけに京都を拠点に活動する映画監督の佐藤訪米さんと出会ったのである。山崎は佐藤に就いてシナリオだとかの映画作りの基本的なあり方を教わった。このようにして山崎の映画製作の基本を学び、人的ネットワークもこの時期に作られた。



▲大学在学中に制作した唯一の長編作は、愛知県北設楽郡の花祭という民俗芸能のドキュメンタリー作品「山のなかの劇場」。当時専攻の文化人類学で必修とされたフィールドワークの中で撮影が行われた

映画をあきらめる

大学を卒業しても一般の会社に就職するつもりはなかった。周りの仲間たちは割と就職せず映画を続ける連中が多かったからだ。しかし思うようにことは進んでいかなかった。

「卒業後も映画は作ろうとはしていたし、作ってもいた。実際何篇もある。しかし、これらの作品は思うようにはいかなかった。ほとんどあきらめに近いような状態にもなっていた。映画を作るにはかなりのリスクがあるんで、そのリスクに耐えうるモチベーションだったり。リスクっていうこと自体もわからないままやっていたらうから。悩みながらやっていた。映画なんかもう撮れないんじゃないかと思っていたんでしょね。」

こうして8年過ごした京都から大阪に戻るが、そこもまた居場所ではなかった。

「いったん大阪に戻って、ゼロから何をしようかなって思って、大阪の街を家の周りとか梅田から家までとかを歩いてぶらぶらしていたんですね。その時すごく僕が知っていた昔のかつての大阪の賑わいであったり元気なところであったりとかが見えなくて。このまま大阪ってくたびれていくのか

なという。大阪という街に対する執着であったり愛着であったりというものも信じられなかった。そこでそれから生きてくことも。」

農業という選択肢 — 真庭へ

「どう生きていくかということを考えた時、同時に京都時代から農業という選択肢はあった。何をやっていこうという時にいろいろ他にも選択肢はあったけど、もう一回勉強しなおしてとかあった。ただ食べ物を作れるということが何らかの自信の回復であったりとかになるかもしれない。もしかしたら、それからまた映画を撮れる思考になれるかもしれないというのがあった。

それとここ（真庭の父の実家）があったというのがあったと思う。夏休みとか正月とかには来てたんで。親父が長男で僕がまた長男なんで、ここが将来いづれかどうにかしないといけない場所っていう認識はあったんですよ。だとすると、元気な若いうちに。27歳だったんで。来ちゃおうと、農業をすることを決めるんですよ。」

こうして映画にいったん終止符を打つことになる。



▲屋敷と畑。昨年まで父の実家であるこの家に住んでいたが、今は結婚して久世からここに通っている

ふたたび映画を

こうして真庭に来てから1年半以上は映画を横に置いて農業に専心していた。

「1年半は結構長い。まわりの仲間の声とかが聞こえてくるし。何か映画というか文化というか芸術というか。それがここにはない。

普段触れていたものがない。実際真庭には映画館がなく、車で1時間ぐらいかかる。」

「いろいろあって。上映会を一回やってみたいと思って、勝山らへんにそういう場所がないかどうかいろいろまわっていた時に後で一緒に映画をつくることになる加納一穂（『紅葉』プロデューサー）と出会い、意気投合し、シネマニワ（cine/maniwa）をつくることになったんです。」

こうして2007年11月に勝山で第1回の上映会がおこなわれる。

「上映会を1回して2回して、わりと面白くて、上映会するとなるとみんな来てくれる。何回か続けていって5回目くらいに一般映画ではなくて自主映画の上映会をおこなった。岡山で作られた映画とか、僕の昔の映画とかもやる上映会をした。その頃から何かここでも映画を作ってみようかというような雰囲気になったんです。」

2008年の秋、山崎さんは再び映画の制作に取り掛かる。トマト農家を舞台にした作品『紅葉』。シナリオを書いて、真庭の仲間数名と、昔の仲間づてに知った岡山の映画製作者にも呼びかけて何人が合流してもらった。

『紅葉』は大阪のインディーズ賞を取り、「岡山映像祭」で上映されることになるが、その時たまたま昔の映画仲間の作品も招待されていた。打ち上げの時にまた次も作れないかという話になって、そこから映画作りに突入していく。『ひかりのおと』『新しき民』のプロデューサーを務める桑原広孝と出会ったのもこの時である。

このように山崎さんの映画への回帰は何か一つ一つ決断した結果もたらされたものではない。タイミングと人々との関係の中で自然と流れていくようなかたちで山崎さんは映画に戻ってきた。

巡回上映と「地産地生」― ポスト3.11の中で

真庭での2作目『ひかりのおと』では、「地産地生」という惹句を使っているが、これは編集中に上映方針を決める中で考え出されていった

言葉である。

「この映画をどうゆうふうにして上映していくかと考えていた時に、東日本大震災が起きた。そんな中で巡回上映というかたちに決めたんですが、3.11の後、誰もが自分に何ができるのかということを考えてだろうし、表現者であればなおさら考えるだろうと。」

「いざという時のために、というのはあった。何があってもおかしくないという状況ではあった。そのためにネットワークづくり。蜘蛛の巣を張るというようなことはできるんじゃないか。誰かが蜘蛛の巣のどこかで震えれば、それが全体に伝わって震えるみたいなことができないか、ということです。」

こうして地方で映画を作ってその映画をその地域から上映を始めていく巡回上映という方針が固まった。『ひかりのおと』は2011年10月末から翌3月まで真庭市を中心に岡山下50か所以上で上映がおこなわれている。まさに稀有な巡回上映であるが、これを言い表す言葉として用意されたのが「地産地生」である。

『「地産地消」という言葉はもちろん農業やっているので、ダイレクトに考えざるを得ない言葉の一つではあったので、考えてはいたんですけど。何か物足りなさがその言葉にはあって、農業農産物の地産地消ということを芸術でも文化でも映画でもやってもいいんじゃないかというのがあった。」



▲ 映画「ひかりのおと」のパンフレット

『ひかりのおと』の公式パンフレットには、「農産物と同じように『文化』も土地から生まれて、育て、地域で消費され生きつづけてほしい」とある。「生」には、この映画の上映が消費されて終わるものではなく、何かを生み出すものであってほしいという願いが込められているのである。

ではその巡回上映でどんなことが得られたのだろうか。その答えはやや意外なものだ。

「何か見失ったような気がするんですね。巡回上映やってみて。すごく成功したと思うんですね。動員もたくさんできたし。ただ丁寧にしようとしていたけれど、怒涛のスケジュールで、しかも小さな体制でやってるし。こっちがやるというか、まわりの人に迷惑をかけたし、負担をかけた会場もあった。」

『新しき民』でも巡回上映という方式を踏襲し、観客の手応えも普通の劇場では味わえないいろんなフェイス・トゥ・フェイスのかたちで返ってくるというから、基本的には成功とみなしているに違いない。実際、山崎さんはすべての上映会に出向き、回収された何千枚ものアンケートの中に手ごたえはたくさん感じたという。思った以上に人はつながっている、という感覚もつかめたという。

その一方で、次のようにも言う。

「迂回しようとすればできる問題ではあるけれど、本来巡回上映したという目的というのは、映画館がないので山の中でも映画館をつくって、たとえ10人でも20人でも、僕も行って、見た人と話して映画を楽しむということがしたかった。きれいごとではなくて。ただ、そればかりしていると経済的なことになってくる。」

「ノルマみたいな、こなしていく上映会になってしまう。それは興行師の仕事であって僕のすることじゃない。何か割り切れないところがある。だったら最初から映画館中心に掛けていけばいい。」

そもそも映画は多くの人がかかわって成立する芸術だ。とうぜんそれはそれを支えるに応じた数の観客を必要とする。それは自主上映映画だとしても同様だろう。『ひかりのおと』の場合、その精力的な巡回上映がこの後の映画制作や新しいネットワーク作りにつながっていくことも見逃せないし、山崎さんもそのことは自覚している。その一方でシネマニワにおいて掲げた初志も大切にしたい。だから割り切れないのだろう。

『新しき民』の誕生 — 一揆というモチーフを中心に

『新しき民』のモチーフには地元で江戸時代実際に起きた「山中一揆」が使われている。そこにはどんなねらいがあるのだろうか。

「もともと山中一揆には興味があって調べてはいたんですけど。これもまた3・11にかかわってくるんですけど。震災の直後の3月14日に山中一揆のシンポジウムがあったんです。個人のお宅でやるような15人くらい集まって一人の老人が徳右衛門（一揆のリーダー）について語るっていう小さな会だったんですけど。すごく印象的で、引っぱることになるんですけど。震災の3日後のはなしなんですよ。テレビは津波、原発、一色で。ほとんどの催し物は中止していつて、自粛ですよ。」

そんな中で90歳すぎの老人（山中一揆顕彰会・植木紋次郎さん）が徳右衛門について1時間ぐらい延々と話すんですけど、非常に楽しそうに、笑いがあって。なんかすごく救われたんですね。山中一揆の映画それまでも興味があったんでいつか撮れればいいなってなっていくんですね。

2011年の冬は『ひかりのおと』の巡回上映をしていくんですけど、その時には一揆について考えていくんですよ。そして、巡回上映を回っている最中に、その場所その場所にいろんな協力者がいて、こういう人たちと蜘蛛の巣を掛けるように、一揆を起こすかのような映画作りが、一揆の映画

をつくるにあったてできれば面白いんじゃないかと思ったんですね。逆にそういう作り方じゃないとできないということもあった。」

こうしてプロデューサーの桑原さんに相談する。彼は迷ったが、了解して東京から真庭に移住してきた。そこからは一気に映画作りに向かっていく。

時代劇への挑戦

時代劇はそれまで取り組んできた現代劇に比べると、多くの点で困難があると思われるが、その辺の目算はどのように立っていたのだろうか。

「ATG（日本アート・シアター・ギルド）とか、かつて低予算で作った時代劇はないことはないのですが、それをみるとこういうコンパクトな作り方が自主映画でできないことはないと思っていた。ただでもぼやっとした確信ですね。」

一揆というトピックに付随するエキストラ集めについても、はじめから困難は感じなかったという。

「人を集めるのは問題ではなかったんですよ。できると思っていたんです。『ひかりのおと』をやっている手応えとしてそれは集まってくれるだろうと。あとは技術と予算ですね。予算は当初より倍かかっている。目算を誤ったといえは誤った。」

映画の評価について

海外の映画祭に招待されたり、次々と全国での上映館が増えるなど、著しく人気が高まってきたように思えるが、こうした評価の高まりについてどのように考えるか。

「仕掛けているから、そのように見えているという面がある。戦略的に。すべての映画が勢いを強引にでも作っていかないと。もう一つは作品のもっている現在性という

ことにある。それは狙ったところでもあるので。時代が急速に迫ってきているというか。閉塞した現状に風穴を開けるところにまではいかないかもしれないが、見てくれてもらった人には考えるきっかけになれば。」

「一方、もちろん映画ってそういうメッセージ性ばかりでなく、娯楽としてのものもあるべきだと思うわけで、そればかり取り上げられてしまうことが多いので、またそれも悩むところでもあるんですけど。」

地域の歴史的アイデンティティを取り上げる ことについて

「山中一揆」はこの地域における重要な歴史の一部である。そうした題材をとりあげることで、様々な反応があることが予想されるが、その点はどのように考えていたのか。

「もちろんいろいろ考えた末、僕なりに誠意をもって山中一揆をモチーフにしたわけで。もちろん修正したり捻じ曲げたりする悪意なんかはないけれど、僕が調べ、またこれまで調べてきた方から話を聞いたことを誠意と敬意をもって、僕なりの道理の中でシナリオにしたつもりです。それには批判もあるだろうから、それは受け止めようとは思うんですけど。」

「あともう一つ僕がここに住んでるというのが大きくて。他所から来てたとえば東京の制作会社が入って取材をしてシナリオを書いてどうのというのではなくて、あくまで僕が一揆があったここにいるというのが非常に大きくて。ある程度自分を納得させるために自由にやらせてもらうということは決めましたね。うまく言えない。ある種の映画を作っていて、この場所であったことについての映画を作るにあたって誰にも何も言わせないよというのはあるんですよ。それも義民顕彰会の人たちと話して、『あなたが考えることが歴史になる』と、『歴史

とはそういうものだ』とおっしゃる方がいて、それがヒントになったわけです。いろんな史料があるが、どれが正しいのかはもちろんわからないわけで、考えた果てにこれはこうだったというのは、その土地の人が決めるべきだというわけです。たとえば、名前が古文書と言いついで食い違っている場合がある。どっちにすべきかですごく悩まれた時があって、そこでその人が大学の先生に訊きに行ったそうです。『それはあなたの方が決めることであって、それが正しいんだ』って言われたらしいんです。彼らが調べ上げてきたことが歴史になる。それが残っていくべきである。土地の人が記録していけばいいということを、同じように言われたので、僕も自信をもってやったということです。」

一揆を映画にする際には、これまでの映画がしてきたようにリーダーを主人公に据えるのがオーソドックスなやり方と思われるが、『新しき民』はそうなっていない。このあたりはどのようなねらいがあるのだろうか。

「歴史を調べ尽くした果てにある意味教科書的な映画を作ることにも非常に大切だったのかもしれないけれど、それは僕たちがやることじゃないというのが共通認識として仲間ではあった。あくまでこの映画は現代に向けた映画にしたいということから、どういう映画にするか、すごい迷っていた時に、ある一揆参加者の子孫から、一揆の途中で逃げて全国行脚をしてほとぼりが冷めた頃に帰ってきたという話が聞けた。いろいろ調べていくと彼と一揆の首謀者とも関係していたようだという新事実が見つかった。新たな発見があって、まあ、彼を

主人公にすることで、一揆というものを描くというよりは、外側からもっと何か当たり前の目線で僕たちが言えたり、言いたいことが投影できるんじゃないか。そう決まってシナリオを書きだしたんですね。」



▲日によって違うが、大体8ケースほどを毎日農協に出荷している。10月中旬はトマトの出荷も一段落し、一日の出荷量も少ない。

『新しき民』は、現在へと問いかける歴史叙述の新しいかたちとして読むことができるのではないかな。そのようなことを思わせる山崎さんの言葉であった。だが、そうとはいいつつも、映画はどのように見ようと自由だという点は確保しておくべきだろう。

(了)



▲小ぶりのやつを一ついただいたが、甘みと同時にトマト独特の香りが口に広がる